

副葬された石鏃一堂の貝塚6号人骨に伴う石鏃一

栗島義明

副葬された石鏃

一堂の貝塚6号人骨に伴う石鏃

栗島義明^{1*}

要 旨

太平洋側に比べ内湾の少ない日本海側では縄文時代を通じて貝塚遺跡が少なく、加えて貝塚の調査事例も決して多いとは言えない。そのような中、新潟県佐渡市の堂の貝塚は多数の人骨を出土し、特に6号人骨ではサメの歯の垂飾りと共に13点の石鏃が副葬された状態で発見されたことから全国的にも知られている。

本論ではこの人骨に副葬された石鏃を詳細に検討し、これらが複数型式によって構成され、欠損箇所のない未使用の完成品であることを確認した。石鏃は在地石材（碧玉：Jasper、蛋白石：Opal）によって製作された中・大型の規格性の極めてたかい一群であり、埋葬を前提に製作された可能性も考える必要がある点を指摘した。

人骨に伴う石器類として石斧や石匙、そして石鏃が認められる事例は比較的良好に知られている。だが、堂の貝塚のように特別に製作された完成品がまとまって出土した例は少なく、しかも石鏃が形態別にまとまっている点から石鏃は矢柄が装着されたうえで人骨に並べるように副葬されていた可能性がたかい。本例は縄文時代の副葬品の評価や埋葬習俗を考えるうえで一つの典型となる事例とすることができる。

キーワード：石鏃、矢柄、碧玉、蛋白石、サメ歯、集団墓、副葬品

1. はじめに

太平洋側に比べ内湾の少ない日本海側では縄文時代を通じて貝塚遺跡が少なく、加えて残されている貝塚の調査事例も決して多いとは言えない。そのような中で新潟県佐渡市金井町に所在する堂の貝塚は、1969年に農業基盤整備事業及びそれに付随した農道工事に伴い約650m²にも及ぶ広範な区域が発掘調査された希有な貝塚である。当該遺跡の所在自体については早くから知られていたもののその実体については殆ど不明であったが、この発掘調査によって遺跡が淡水産のサドシジミを主体とした貝塚であること、そして遺跡が縄文時代中期の集団墓であったことが明らかとなった(金井町教育委員会1967)。

堂の貝塚の調査成果で最も注目されたものが出土した8体の縄文時代中期の人骨群であり、その詳細については既に報告書に於いて性別・年齢・頭位方向・埋葬様式等々に関する詳細な分析・検討がなされている。その中でも特に注目されたのが6号人骨であり、この仰臥屈位の状態に埋葬された人物は壮年～熟年男性とされ、その胸部からはイタチザメの歯製の垂飾1点、そして頭骨左上に副葬品と考えられる13点もの石鏃が出土したことから学界でも広く知られるようになった。石鏃13点は横位に向いた人骨頭部に接するよう墓壇底面から出土、しかも総ての製品が完形品である上に長軸方向を揃え恰も折り重なるような状態で発見されたことから、当該人骨については「狩猟仲間のリーダー」(原田1988・石川1994)などと評価されてきた経緯もある。

1 明治大学黒耀石研究センター 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町1-6-3

* 責任著者：栗島義明 (yo_kuri@meiji.ac.jp)

いずれにしても中部日本地域では狩猟具を副葬した縄文人骨は希であり、特に当該資料のように整然と埋葬人骨に寄り添うように多量の石鏃が副葬された事例は、その後の調査に於いても殆ど類例の知られていない稀有な事例と評価される。改めて本論で当該資料を取り上げようとする主な理由はこの点にもある。なお、本資料については近年に至り出土石鏃の資料化と詳細な分析が公表され（加藤2018・2020）、今日、本資料の重要性を再認識される契機ともなっている。本論にて改めて当該資料を取り上げることは屋上屋を架するに等しいかも知れないが、より多角的な視点からの再検討を心がけつつ資料検討ができればと考えている。

2. 堂の貝塚と出土資料

2-1 遺跡概要

最初に堂の貝塚についての概要を確認しておこう。遺跡は新潟県佐渡市金井町に所在している。新潟県西部に位置する佐渡島は本州とは約30kmの距離を隔てており、その面積は沖縄本島に次ぐ約855km²を誇っている。佐渡島はしばしば「H」字に例えられる特徴的な形を持っており、北側には大佐渡山地、南側には小佐渡山地が北西方向併走するように山塊を擁しており、二つの山並に挟まれた場所は島嶼部には稀有とも言える広く平坦な平野（国仲平野）が広がっている。この国仲平野の南北にはそれぞれ真野湾・両津湾が位置しており、後者の両津湾の略南側には新潟県内最大の湖である加茂湖（汽水湖）が広がっている。この国仲平野の南側に位置する小佐渡山地は比較的標高の低い山並が続き、国仲平野へと続く西斜面では丘陵状地形の発達が顕著に認められる一方、

大佐渡山地は島内の最高峰である金北山（1172m）をはじめとして急峻な山並を特徴とする。この大佐渡山地の北側は山塊が海岸にまで迫り断崖絶壁と無数の岩礁が50kmにも及んでいるが、国仲平野に面した南側では比較的なだらかな舌状の丘陵地形の広がりを目にすることができる。

この山塊から派生する丘陵部は、流出する多数の小河川によって開析されている為に多数の舌状台地地形が形成されており、これら小河川を望む台地部や国仲平野を望む舌状台地先端部付近には、縄文～古墳時代にかけての遺跡が多数残されている（図1）。本論で検討する堂の貝塚もそのような地形上に占拠した遺跡の一つであり、国仲平野を南側に望んだ丘陵先端部付近に立地している。遺跡の標高は約16mを計測する。

広大な国仲平野一帯は縄文時代には満潮時に海水の浸入する汽水域であり、そこに豊富に生息したサドシジミが本貝塚を始めとした佐渡地域の貝塚構成の主要貝種となっている。堂の貝塚は佐渡市金井町大字貝塚の通称「堂後」に所在しており、字名が端的に示しているように古くから一帯では貝殻（サドシジミ）の散布が知られていたという。その為に当該地はこれまで「貝塚の貝塚」・「貝塚遺跡」・「堂の貝塚」・「金井貝塚」などとも呼ばれ、明治時代の中頃より地元研究者による小規模な発掘調査が断続的に実施され、縄文土器や石器と共に数体の人骨も発見されていたらしい。堂の貝塚付近では同様な舌状台地上に城の貝塚、小河川を隔てた北西側に西の沢遺跡、国仲平野側には中島貝塚・泉貝塚などが確認されており、いずれの遺跡からも縄文時代中期を中心とした土器群が多数発見されている。恐らく中期段階には国仲平野へと海水が流入すると共に丘陵部を開析する小河川部付近に

まで入り江が伸び、遺跡周辺一帯に広大な半鹹半淡水の「古国仲湾」が広がるという古景観が復元されるであろう。

ところで先に述べたように、本遺跡の直接の調査原因は農業改善事業に伴う基盤整備及び関連した農道工事であり、1969年の7月25日から8月7日の約2週間が調査期間として費やされている。実際は調査に先立つ聞き取りか

表1 土壙規模と埋葬人骨の特徴

	グリッド*	長径	短径	深さ	性別・年齢	頭位	埋葬形態	その他
1号	L-1	100cm	75cm	3cm	男・熟年	北北西	仰臥屈位	ピット・礫
2号	B-7・8	94cm	69cm	4cm	女・青年	西	仰臥屈位	土器片
3号	C-7・8	78cm	62cm	12cm	?・幼年	西	仰臥屈位	立石
4号	K-13	?	?	?	?・熟年	?	?	
5号	1T	95cm	65cm	10cm	男・熟年	東	右側臥屈位	土器片
6号	D-1・2	135cm	90cm	7cm	男・壮熟年	西	仰臥屈位	石鏃・垂飾
7号	F-3	85cm	55cm	10cm	女・老年	北西	左側臥屈位	立石
8号	H・I-5	65cm	57cm	5cm	?・幼年	北西	屈位?	

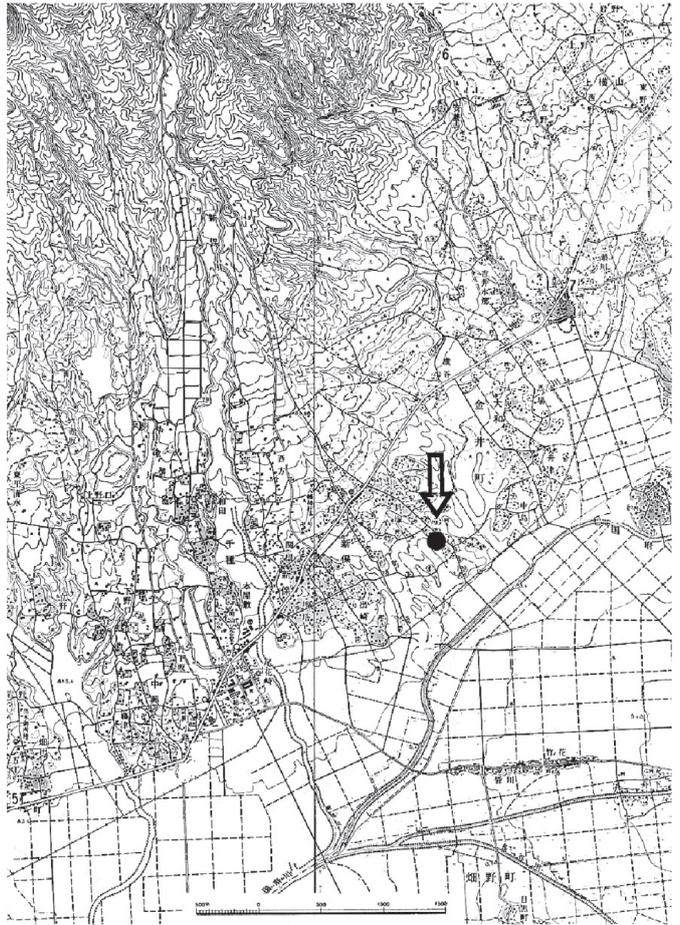
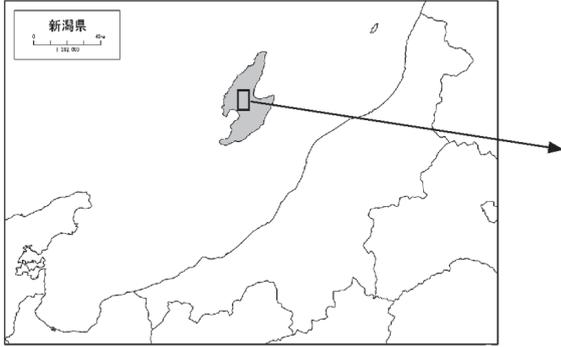


図1 遺跡の位置 (●印)

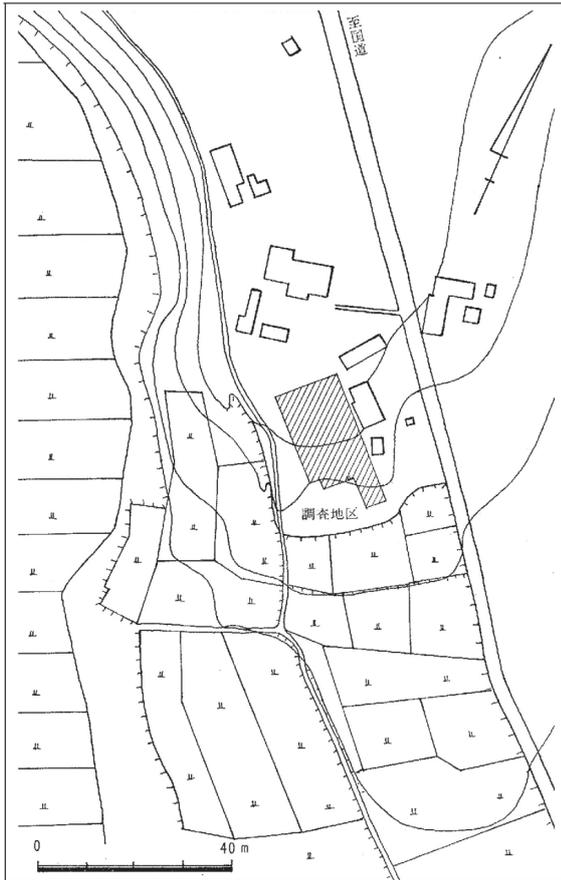


図2 堂の貝塚調査区



写真1 堂の貝塚遠景

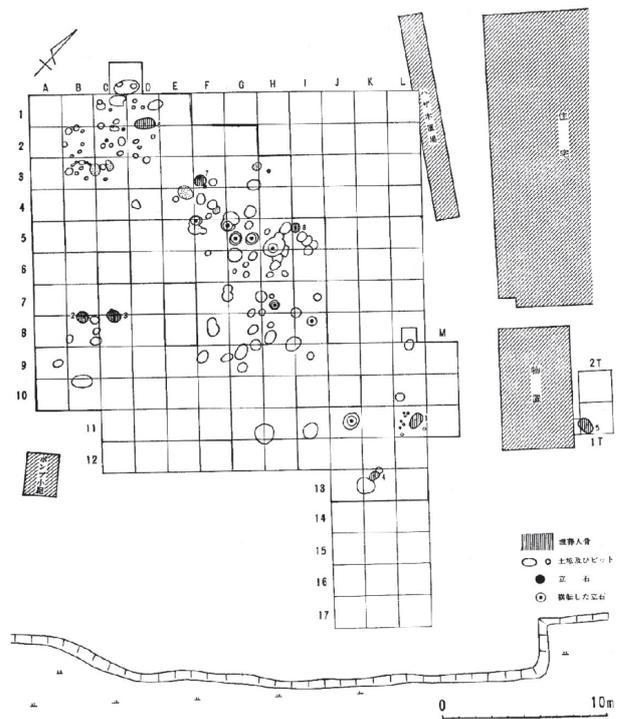


図3 堂の貝塚遺構分布



写真2 サメ歯製垂飾り



写真3 石鏃の出土状態



写真4 堂の貝塚6号人骨

ら既に本調査区では遺構面が浅く貝層も薄いことが想定されており、地表面に散在した貝と同様に貝層を構成する貝殻も細片であることが確認されていた。実際の発掘調査でも純貝層を検出することはできず、確認された貝層の範囲は東西35m、南北20m程の範囲に留まり、報告書によれば「貝層の厚さは地点によって大きくことなるが平均約30cmで、中心に混土貝層があり、上下に混貝土層が薄く存在する」状況であることが改めて追認されることとなった（図3参照）。

この調査に伴って実施された貝層のサンプリングからは、構成貝種の98%が汽水域に生息するサドシジミによって占められていること、他にはサザエ、カキがごく少量出土しているに過ぎないことが判明している。貝層の主体を占めるサドシジミは最大で4cm程、最小で1cmを計測しており、2.5cmから3.0cm程度の中型品が約半数を占めていた。また、他の自然遺物としてはイノシシ・シカ・ウサギなどの哺乳類、カモなどの鳥類、タイ・フグなどの魚類が確認されており、また植物性遺物として

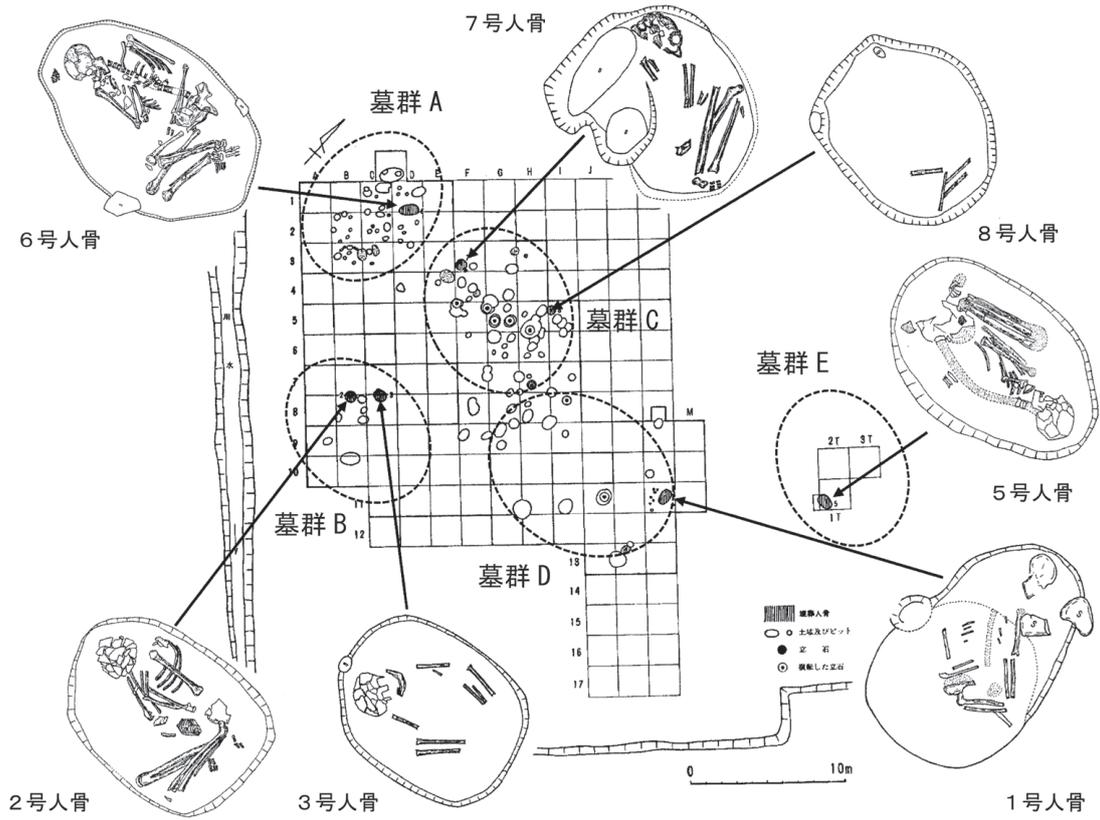


図4 埋葬人骨と墓群構成

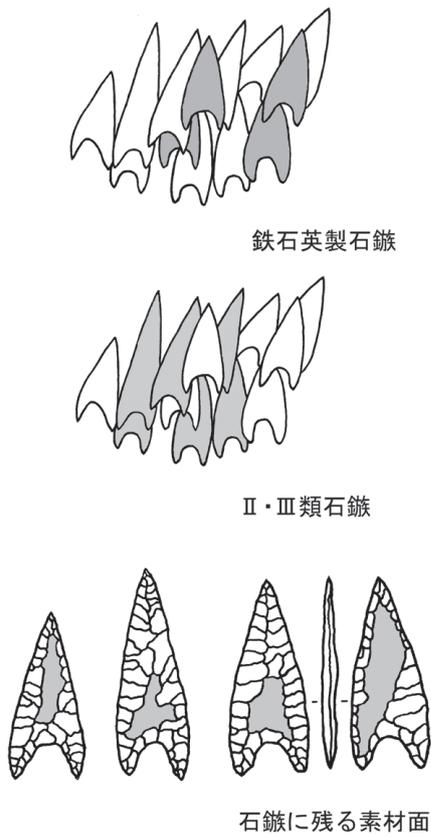


図5 出土石鏃の特徴

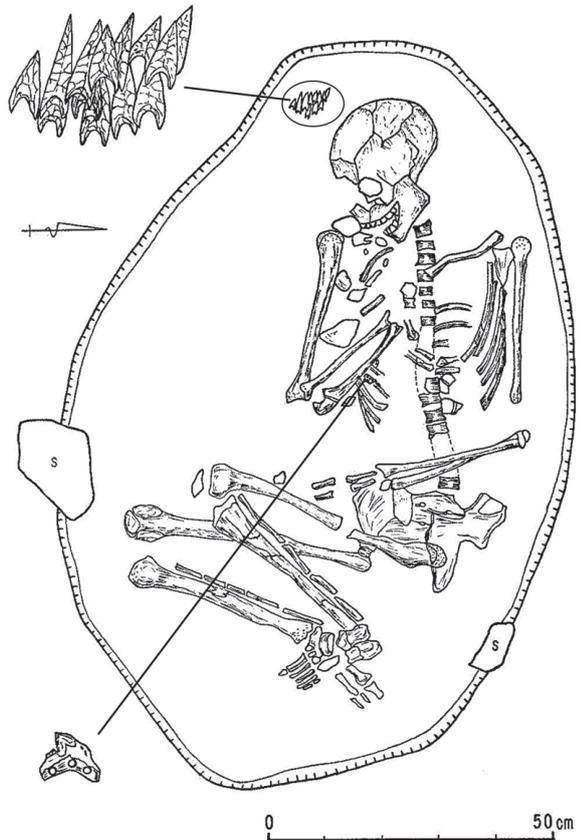


図6 6号人骨と副葬品

は若干のクルミの出土も報告されている。

堂の貝塚では、実際の貝層堆積は極めて薄いうえに、その貝層を構成する貝類の大半はサドシジミが占めており、しかもその殆どが破碎された殻細片が散布したものであった。このような条件下で埋葬人骨を伴った墓壙・土坑・ピット・立石を伴う土坑など多数の遺構群が検出されたが、これらの遺構群は基本的にそのいずれもが貝層下に形成されたものであったことが明瞭である。それらの分布にも一定の偏在性が指摘されてはいるものの、出土土器から判断する限りは各遺構群では大きな時間差を見出すことは困難であったようである（堅木・鹿取2012）。そうした調査所見に対応するように、調査区の中央部の径10m程の範囲には立石を伴う土坑の纏まりが検出され、それらを取り囲む周縁部に恰も埋葬人骨群が検出されていることが指摘できそうである（図4参照）。次にこれらの埋葬人骨についての概要を記した後、墓壙群に残された人骨の中で最も保存状態が良好な人骨、石鏃とサメ歯製の装身具を伴った第6号人骨を中心に取り上げ検討したい。

2-2 埋葬人骨群

堂の貝塚から発見された人骨は8体であり、うち7体については埋葬施設としての墓壙の掘り込みが確認されている。これらの人骨が遺存した土壙と貝層（混土貝層・混貝土層）との重複性を見比べると、2号並びに7号を除いてそこに重複性を見出すことは出来ないものの、いずれの土壙に関しても遺構確認面が総じて浅く、結果的に人骨の残り具合は相対的に良好ではない。調査区中央（E-I：3-7）の約10×10mの範囲に集中する土壙群にも、本来は多数の遺体が埋葬されていた蓋然性はたかいと判断してよいのであろう（図3参照）。また3号人骨の埋葬された土壙に見られるように、頭位方向（西）上の壁際に立石が設置された事例を念頭に置く限り、中央区域を中心に点在する立石を伴う8基についても埋葬施設と理解するのが妥当と考えられる。

さて、8基の土壙規模並びに埋葬人骨の特徴についてまとめると以下のとおりである。また、調査区内に於ける遺構群とこれらの人骨を伴う土壙との位置関係をまとめたのが図4である。この分布図を見るとそれぞれの分

布域を単位として、実際は人骨の頭位方向が一定の纏まりを持ちつつ、空間的に分離した傾向を読み取ることが出来そうである。

仮にそれぞれの単位をA～Eと捉えると、各単位は径10m程の範囲を構成するように土壙群が点在していることに気付く。AやCに土壙が集中するのに対してBやD・Eでは散漫な傾向が読み取れるが、遺構深度が浅くて確認面が耕作土直下であることを考えると、当然のことながらこれらの遺構群が直ちに本来的な姿を反映していると捉えるのは危険であろう。いずれにしても調査区内や周辺に住居跡を含めた遺構の検出がなされていない点は、当該区域が墓域（集団墓）として評価されるべき点の妥当性を示唆していると言えようか。

さて、6号人骨についての人類的な所見については報告書に掲載されており、それによれば6号人骨は壮年から熟年期の男性であると報告されている（小片・森沢1977）。本人骨は出土した中でも最も良好に保存された資料であり、長軸135cm、短軸90cmの墓壙の南北壁部に扁平礫が設置されたように確認され、頭位が西を示す人骨の右腕は胸部に左腕は腰部に在る。南位方向に両脚はV字状に曲げられ、腰部が直角になっている。胸部（体部）と土壙南壁との間には約30～40cmの空白部分を認めることができるが、このような墓壙底部の在り方は他の埋葬事例と比べた場合にやや特異な印象を与えている。

本人骨では石鏃と垂飾の副葬が確認されているが、他にも胸部付近から中期中葉段階の土器片と礫が出土したことが報告されている。人骨を分析された小片氏らによれば6号人骨から想定される男性の身長は164.2cm、また下肢骨には蹲踞の習俗を示す特徴が顕著に認められているらしい。

6号人骨が仰臥屈位の状態で頭位が西方向を示している点は前述したとおりであるが、頭頂から5cm程西側に離れた場所には石鏃13点が長軸方向を同じくし、恰も複数石鏃を並び揃えたかのような状態で発見された。また人骨の胸部下付近からは、イタチザメの歯を用いた垂飾りが出土した点については既に触れたとおりである。

3. 人骨に伴う石鏃

本遺跡が全国的にも注目されているのは、言うまでもなく当該土壙底面から人骨に隣接した状態で石鏃13点が発見、しかもいずれも微細な欠損部位もみあたらない完成品であり、互いが折り重なるようにして出土したことにある。報告ではこれらの石鏃について次のように簡潔に説明されている。

「石鏃は全部同じ形状で、同じ作りになっており、最も小さいものが長さ2.9cm、幅1.2cm、厚さ4mm、最も大きいものが長さ4.8cm、幅1.3cm、厚さ4mmで抉りのある細身のものである。石質は蛋白石製で白色を呈するものが9点、鉄石英製で赤褐色を呈するものが3本、鉄石英で茶褐色を呈するものが1点となっており、丁寧に作られたもの」

当該資料については人骨に伴う明確な副葬品としての石鏃、しかもその特異な出土状況とも相まって多くの研究者に知られてはいたものの、資料である石鏃についての本格的調査がなされることはなかった。そのようななかで近年、資料再実測を兼ねた詳細な検討がなされた意義は大きいとすることができる(加藤2018)。加藤氏はその検討を踏まえて副葬品としての石鏃形態が酷似したものであること、石材が在地産の蛋白石・玉髓(鉄石英)に限定されていることなどを踏まえ、「堂の貝塚の副葬品の石鏃は作り手が同じ、もしくは同時製作、強い規制などの背景」が想定されるとした。傾聴に値する見解と言えようか。

さて、堂の貝塚6号人骨に伴った石鏃が製作技法、調整加工方法、部位形態などの点に於いて相互に極めて類似した資料群である点は間違いない。しかしながら詳細に観察すると更に3類別することが可能との印象が強い。即ち、以下のⅠ～Ⅲ類別である。

- ・Ⅰ類・・・長さが約2.9～3.5cm、幅が1.3cm前後の一群(No.1～4・6・9・11)
- ・Ⅱ類・・・長さが3.7～3.9cm、幅が1.3cm程の一群(No.10・12・13)
- ・Ⅲ類・・・長さが3.9～4.8cm程、幅が1.2～1.4cmの一群(No.5・7・8)

またⅠ類については、使用石材が蛋白石と玉髓(赤玉石)とに明瞭に二区分することが可能である。9号人骨に伴う石鏃群はその大きさに関係なく、基本的に石鏃の厚さが1.3cm前後を大きく逸脱していないことから、長さが短い本類は他と比べてやや厚身の印象を与えている。同時にこれらの資料は、先端部から脚部へと続く側辺形態が緩やかな弧状を呈し、胴部(身部)から脚部への変換点は不明瞭で側辺部が連続した印象を与えている。左右の側辺部はシンメトリーの形態を有していることが指摘できる。

これに対して、やや身部が長く作られているⅡ類は異なった印象を与えている。身部側辺は弧状ではなく、寧ろ直線的であり、その側辺が脚部へと移行する変換的付近では、緩やかに内側へと湾曲する傾向を指摘することができそうである。同時に左右の脚部形態が相違し、一方方がやや細く製作されている—している点も見逃すことができない。

第Ⅲ類は、或る意味で当該資料群を特徴付ける石鏃形態である。石鏃幅はⅠ・Ⅱ類とは基本的に変わるどころがなく、同様にその最大厚も4mm前後と極めて薄手である点で共通すると言えよう。しかしその身部は長くて側辺部は直線的で、No.8ではやや内湾した箇所も見受けられる。脚部との変換点は不明瞭というよりも、そもそも見受けられず、脚部の端部に至る直前(3-5mm)に湾曲して抉り部の凹部の側辺と交叉している。この箇所については、微細で直線的な微調整の加工痕の存在を観察することができ、意図的にこのような形態を作出していたことを示唆しているようである。

当該石鏃群に於いて特徴的なものは、その幅や厚さ等について13点の石鏃間で大きな変位は見られないことである。また、その最大厚については総ての資料が身部から脚部への変換的の箇所が該当している。この点は多くの石鏃とも共通してはいるものの、本遺跡の石鏃、特にⅡ類とⅢ類については身部がとりわけ長く細身の形態が作出されている。身部の変位に対して脚部、凹部形態も含めて類別された資料群は極めて統一的様相を有していると見做すことができる。

ここでは同時に、このような形態的な特徴を生み出した製作技術についても注意を払っておきたい。6号人骨

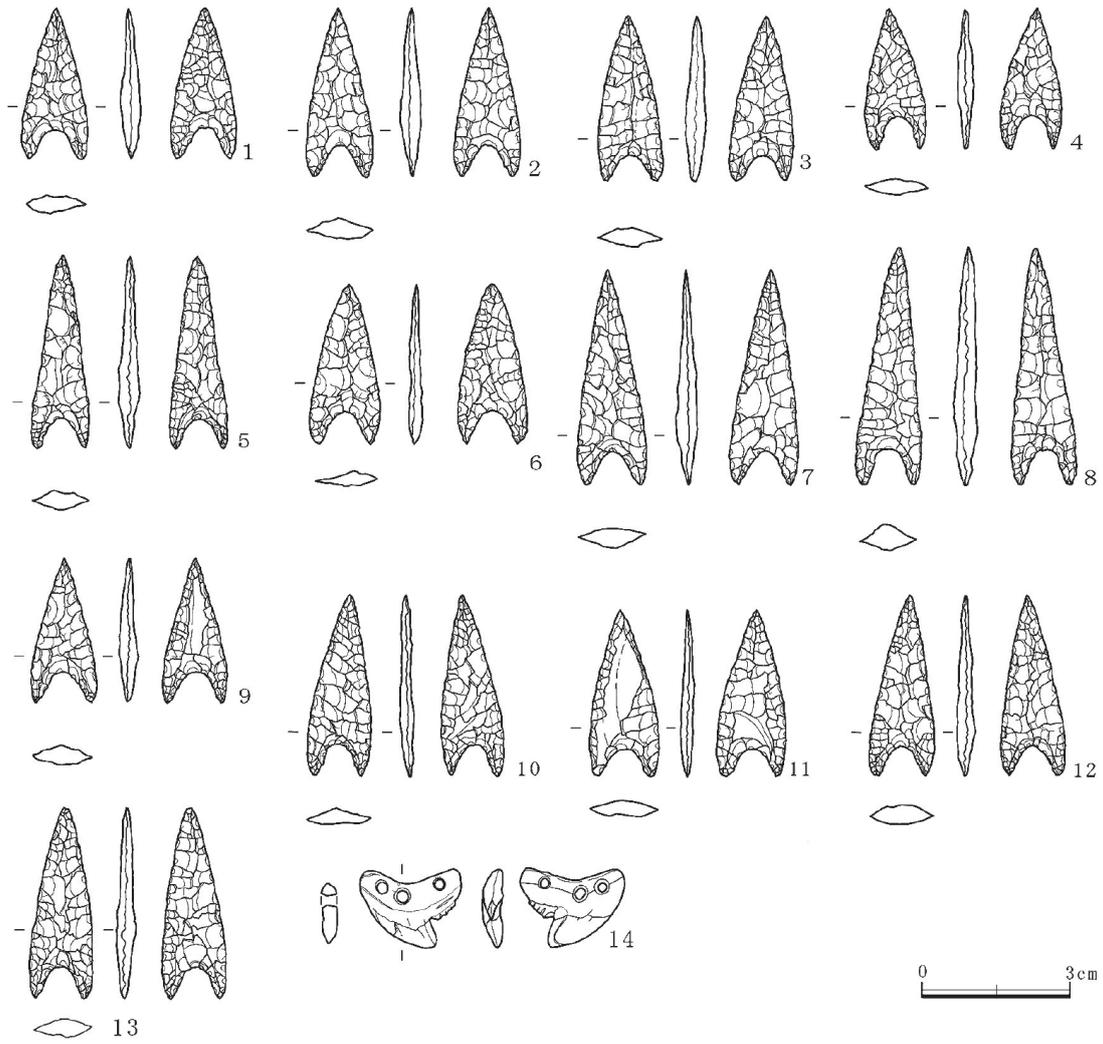


図7 石鏃と垂飾り (加藤2018より)



写真5 石鏃と垂飾り

に伴う石鏃が極めて薄手であることは既に指摘してきた通りであるが、資料群の中には僅かにその表裏面に素材面を残存させた例も確認することが可能である。資料番号のNo.9・10・11の3点である。No.9・10の資料では、実測図で表示されたその裏面側に素材面を僅かに残存させており、その剥離面の観察からは石鏃長軸に対して横方向からの加撃痕跡を示す剥離であったことが推測される。さらに資料No.11ではその表裏面に剥離面が残されており、当該石鏃の素材が加撃方向をほぼ同じくした薄手でやや大型の横長剥片であったことを明示している。素材面に残った剥離面から推察すると、これらの石鏃の素材剥片の厚さは3~5mm程のものであった可能性がたかい。当該資料に限らず、13点の石鏃総ての側面形態も安定しており、左右や上下に重心や厚さのピークが著しく偏ることはなく、薄手でありながらも左右・上下でほぼシンメトリーで均一的な形態を有していたことが容易に理解できようか。

このような石鏃形態を生み出した背景・要因として、最低でも4~5cm長、幅が3cm前後の素材となった薄手横長剥片の存在が指摘できる。表裏面に素材となった剥片の剥離面を残存させた資料11が端的に物語っているだけでなく、他の資料についても剥離面を見ると基本的な器体調整は左右の側辺部からの押圧剥離に拠っている。この調整加工が階段状を呈さずに、左右方向からだけでなく、表裏面に於いても極めて均質的に施されている点は、何よりも素材形態の均一性を強く物語っている。整然と左右側辺部から中軸部方向へと並ぶ調整加工は、器体厚を大きく減じる類のものではなく、あくまで石鏃の平面・側面形態を整える点に主眼が置かれたものと捉えるべきことを知る。

上記したように6号人骨に副葬された石鏃13点の最大の特徴は、石材・形態・制作技術他で相互に酷似した資料群である点に集約されよう。欠損資料が皆無な点は墓壙内へと死者と共に副葬されたことを明示しているが、その資料群は遺跡内で発見された他の石鏃資料や同時期の他遺跡出土の資料とは明らかに異なっている点は注目に値する。石鏃形態の観察からも、これらの資料が統一的に制作された可能性のたかい点、在地に産する良質な蛋白石と碧玉（赤玉石）を用い、3種に及ぶ形態の石鏃

製作がなされていたことが確認できる。大枠では凹基無茎に分類される石鏃であるが、明らかに複数（三種別）に類別される石鏃がその長軸を整えて副葬されている意味は重要である。同様な長身・細身の石鏃形態が、ここ堂の貝塚出土品の中に見当たらないことも無視できない点と言えよう。

4. 石鏃の副葬状態

堂の貝塚6号人骨に伴う石鏃群の最大の特徴は、上記したようにその形態的特徴と石材・製作技術に於ける規格性や類似性等に在る。これに加えて総数13点に及ぶ石鏃、しかも欠損部のない完成品（恐らく未使用品）が長軸方向を同じくしつつ、重複した状態で纏まって出土している点にある。13点の石鏃のそれぞれがどの場所から出土しているのか、個々の石鏃との対応関係は不明である。だが、微細図及び写真を手掛かりとしてその対応関係を眺めてみると、玉髓（鉄石英）の出土位置を特定することは容易である。4点の玉髓製石鏃は集中部の中央に2点、右側に2点と折り重なるように出土している。また、Ⅱ類・Ⅲ類といった比較的大型の石鏃については微細分布図からも大凡の特定が可能で、こちらは中央から左側に集中していることが分かる。未使用の完形品である石鏃、しかもそれらが石材や形態（大きさ）等によって5×6cm程の範囲に折り重なるように出土したが、その狭小な範囲の中でも石材や形態毎の重なりや纏まりが認められることを指摘しておきたい。

ここで改めて6号人骨の埋葬土壙について眺めてみると、仰臥屈位の状態の男性人骨が顔を向けた南方向には60×40cm程の空白部を挟んで土壙壁面に接している。人骨の背部分が土壙壁面と接していることは対照的である。この空白部については、石鏃の特徴やその分布の特徴などから判断する限り、石鏃を装着した矢柄が占めていた空間であったと考えて良いだろう。それが矢柄だけであったのか、矢筒に収められた状態であったのか、更には丸木弓までを添えた副葬状態の復元にまで視野に入れるべきかの判断はここでは控えておきたい。

ところで、全国の縄文遺跡からの出土石鏃が膨大な数

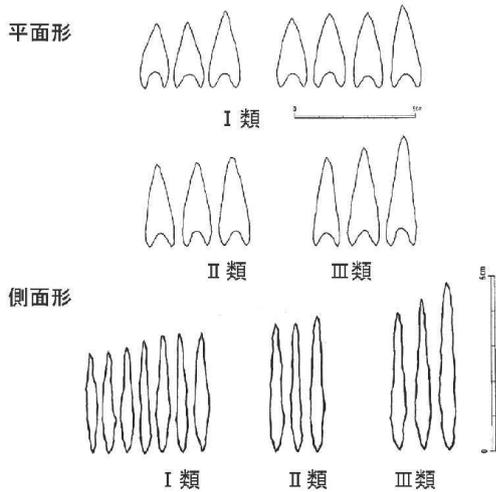


図8 副葬石鏃の形態

表2 副葬石鏃の属性

	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量 g	石材
1	30.6	13.4	4.1	1.2	玉髄(赤玉)
2	34.4	13.4	4.2	1.18	蛋白石
3	33.7	13.1	4.2	1.41	玉髄(赤玉)
4	28.5	12.5	3.4	0.86	蛋白石
5	39.3	12	4.4	1.21	蛋白石
6	32.5	13.5	3	0.98	玉髄(赤玉)
7	44	14.1	4.3	1.69	蛋白石
8	48.4	13.4	4.9	1.73	蛋白石
9	29.4	13.4	4.1	0.98	蛋白石
10	37	12.9	3	1.03	蛋白石
11	33.9	14.2	3.2	1.29	玉髄(赤玉)
12	36.7	13.3	3.9	1.29	蛋白石
13	38.9	13.1	3.9	1.41	蛋白石

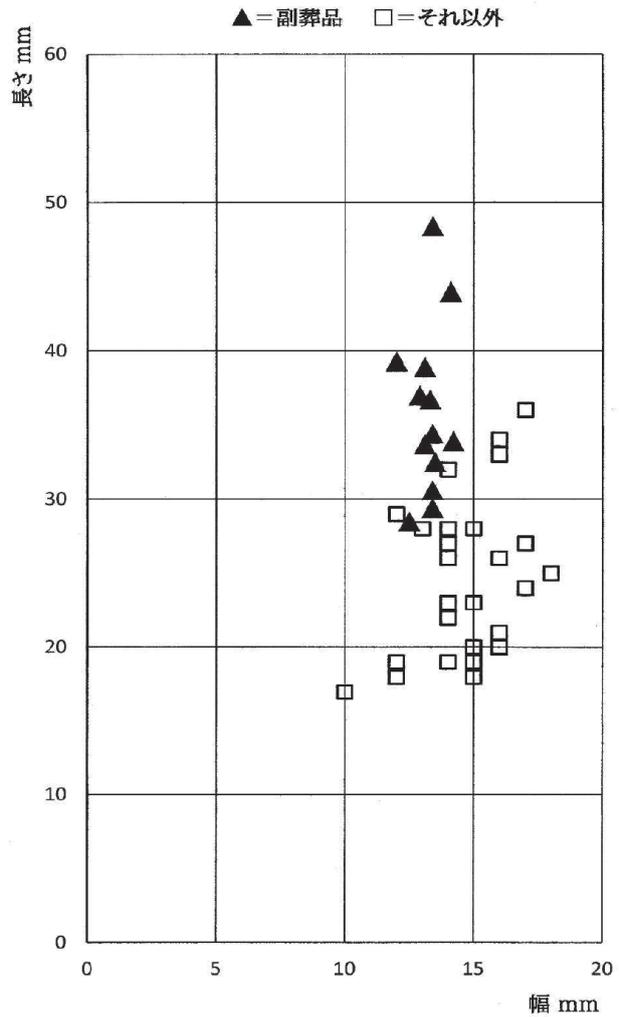


図7 堂の貝塚出土石鏃属性

に及んでいるにもかかわらず、矢柄への装着状態を知ることのできる資料については、埼玉県寿能遺跡と南鴻沼遺跡の二カ所、計3点の資料のみに留まっている(近藤2015)。次に二つの遺跡から出土したそれらの資料を概観しておこう。

寿能遺跡の後期泥炭層中から出土した例は、長さ2.3cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、矢柄の径は約0.5cmを計測している。先端部を僅かに欠損した凹基無茎の石鏃の石材は「フリント」とされているが、チャートなどの在地産の石材であると考えられる。矢柄先端位に関しては石鏃形状に合わせたペン先状を呈するよう加工されており、石鏃側縁側はU字状に削られている。素材はアズマネザサなどイネ科の竹笹類であるとされ、石鏃との接

着については漆が用いられている可能性が指摘されている(近藤2015)。

南鴻沼遺跡からは2点の矢柄付石鏃が発見されている。凹基無茎の石鏃でチャートと頁岩が石材として用いられたものである。頁岩製の石鏃に残る矢柄痕跡は不明瞭だが、チャート製の事例では寿能遺跡例と同じくタケ亜科の素材を、表裏ではペン先状に、側面観をU字形に大きく削って石鏃を挟み込んでおり、その接着には漆が用いられていることが明らかとなっている(さいたま市教育委員会2017)。見落としてはならない点は、石鏃を挟み込む矢柄凸部がその器体のみならず先端部付近にまで及んでいる点であり、完成した状態の矢柄に装着した石鏃は、先端部と体部側辺部の一部、及び脚部のみが

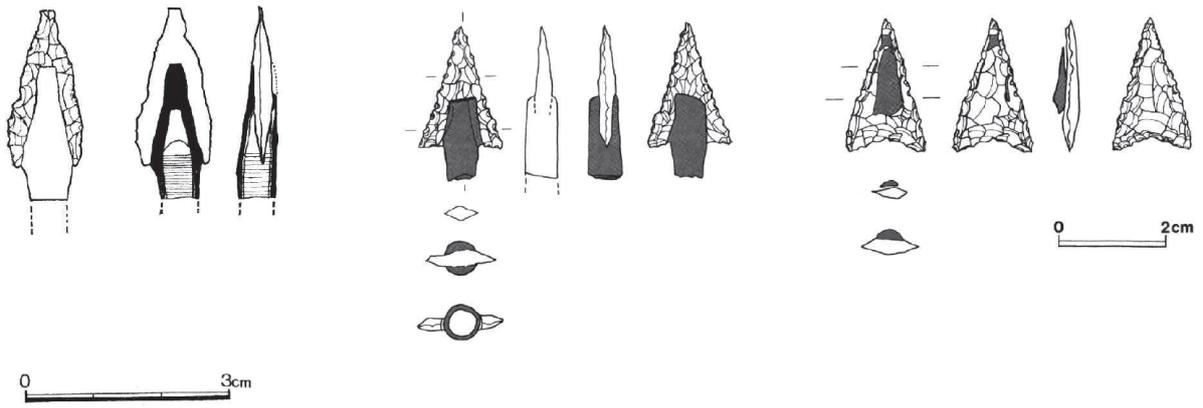


図10 矢柄に装着された石鏃（左：寿能、右：南鴻沼）

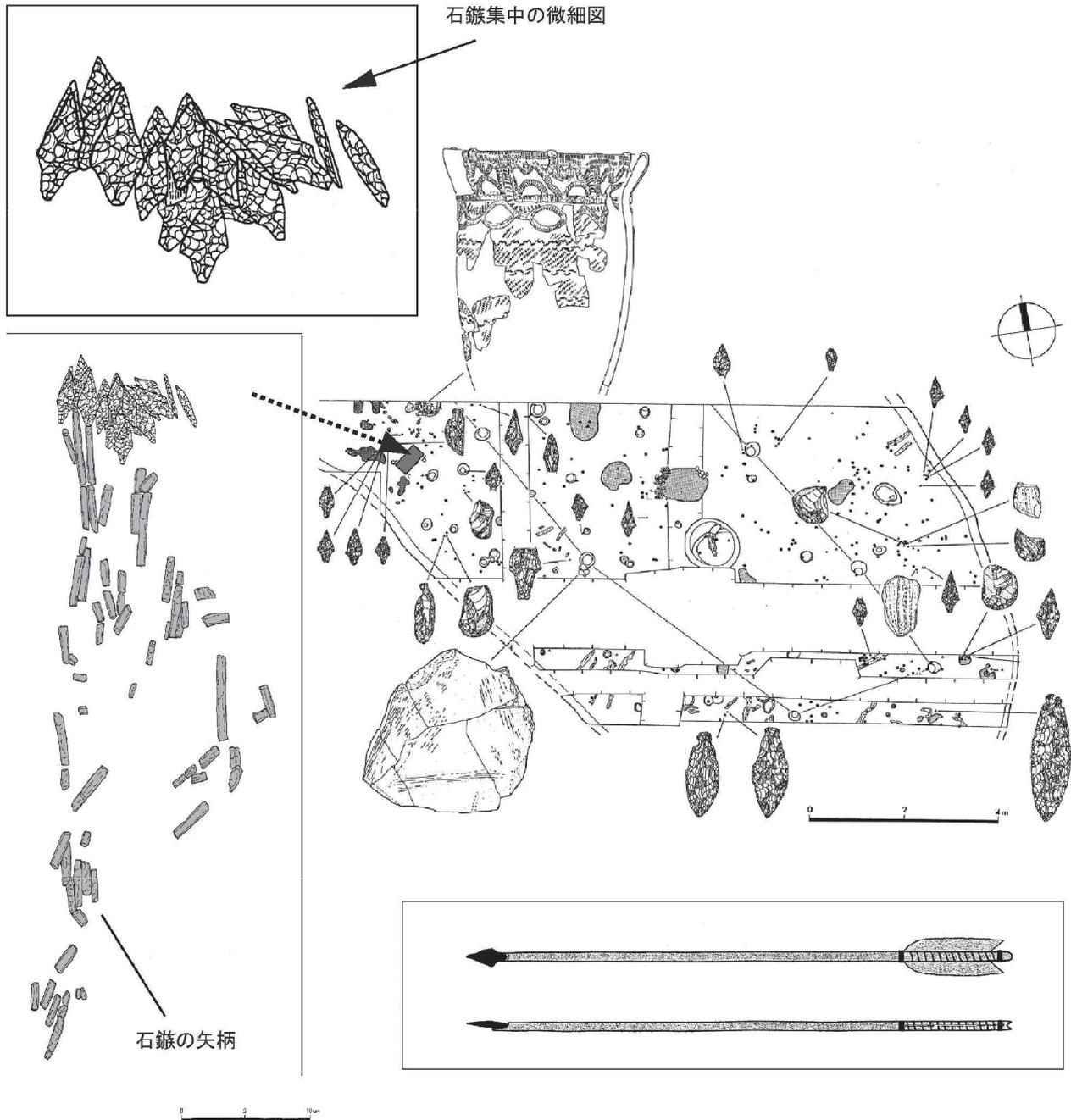
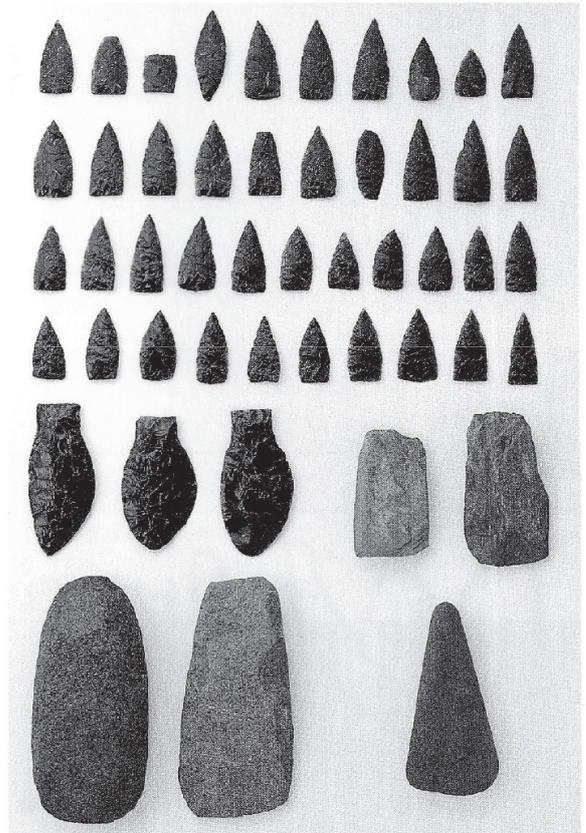
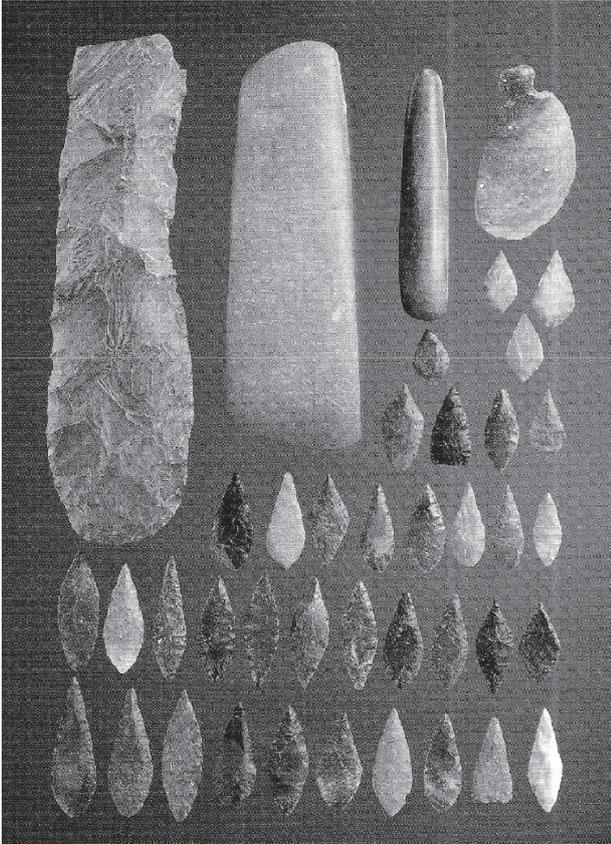


図11 ユカンボシ E11遺跡の矢柄装着石鏃とその復元図



秋田県池内遺跡 (SK208)

北海道滝里 12 遺跡

写真6 墓壇に副葬された石鏃他

露呈しているのみであった。石鏃と矢柄とが思いの外、強固に密着していたことを改めて知ることができる。こうした要因・背景は言うまでもなく、石鏃本体と矢柄との接着面積を確保して漆などの接着材の接地面確保に在ったと推定され、矢柄と石鏃との一体性を担保として対象物への適切なダメージ分散と軽減が果たされていたのであろう。

縄文時代の墓壇内から石鏃が発見される、即ち副葬品

としての石鏃の共伴は決して珍しいものではない。しかしながら、当該事例に於いては人骨の頭部脇に13点の石鏃が、間違いなく未使用状態で軸方向を同じくして検出されている。死体の埋葬と同時に石鏃を副葬し、直ちに埋土を施していたとしても複数の石鏃がこうした状態を維持することは不可能と考えられ、恐らくこれらが矢柄に装着された状態で死者に添えられるように置かれていた点は疑いない。この点で参考となるのが北海道恵庭市

ユカンボシ E11遺跡の事例であろう（上屋2012）。

ユカンボシ E11遺跡の縄文時代中期の住居跡（JH-7）からは、黒曜石製の石鏃19点とそれに付随する炭化した約10本分の矢柄が発見されている。焼失家屋である当該住居跡はやや特異な性格を有していたらしく、長軸18m、短軸9.6mを誇る大型住居であり、複数の地床炉や附属ピットを持ち、床面にはベンガラを敷き詰められた場所もあった。附属ピットの埋土中からは、水洗選別によって石鏃未製品・欠損品を含む約8万点にも及ぶ黒曜石製剥片・碎片、約1.4kg分の資料が検出され、当該住居内で石鏃製作が行なわれていたと評価されている。

出土した19点の石鏃は総て黒曜石製の有茎鏃であり、その先端部は一部で北方向に向くものも存在するが大凡東～北東方向に揃える状態で出土しているようである。注視される点は半数程の資料群の下方（茎方向）に、炭化した矢柄の残存が確認できることにあり、報告者も指摘するようにこれらの資料は「石鏃が付いた矢の束」であった可能性がたかいと判断して間違いなさそうである。石鏃が集中するのは幅10cm程の狭い範囲であるが、矢柄の痕跡を留めない箇所の石鏃は軸方向が乱れており、矢柄の装着という一体性によって石鏃の遺存状態が大きく変化していることが分かる。逆説的に捉えれば、堂の貝塚の事例は矢柄への装着状態、しかも集中の程度や折り重なり具合などを勘案すれば、間違いなく束ねられた状態での弓矢の副葬であったとの評価が導き出されてくるのである。

5. まとめ

堂の貝塚6号人骨に伴う石鏃を中心に、その特徴や遺存状態から復元可能な副葬時の状態について考察を加えてみた。そもそも人骨共件事例が少ない石鏃が纏まりを持って、しかも整然と頭骨脇に集中して副葬されていた要因・背景については、主としてその状況証拠に依拠して様々な評価がなされている。そのような見解について多くを論評する立場にはないものの、以前からこの著名な資料について検討したいと考えていた。資料を子細に観察することで、新たな解釈・評価が可能ではないかと

の希望を抱きつつ資料観察に及んだことが本論を執筆した契機になっている。

その結果、堂の貝塚が規格的な構成を持った集団墓であり、6号人骨に伴った13点の石鏃はその用いられた石材や形態によって作り分けがされていた可能性、更には石鏃形態によって矢柄が揃えられていた点、何よりもこれらの弓矢が矢筒などに納められたうえで副葬されていた可能性について指摘することができた。副葬品とこれらの石鏃は、端部（先端・脚端）の微細な欠損部位さえも見だし得ない、まさに完成品・未使用品であること、しかも当該遺跡や他遺跡で出土している石鏃と比べると突出した大型品と見做すことができる。6号人骨が壮年～熟年男性であることから、石鏃を副葬した背景にはこの人物が集団内でも特に狩猟活動を主導し統括した人物であったと評される場合も多いが、狩猟か漁労か、或いは石鏃製作の熟練工であったのか、多様な解釈や評価の余地がいまだに残っている。人骨の胸部から出土した3孔を有するイタチザメ歯製の垂飾りも気になるところではある。また東北から北海道にかけて広く分布する、土壌内からの石鏃の多量副葬事例との比較検討も、今後に残された研究テーマと位置づけられるであろう。

謝辞

本論を草するにあたり加藤元康、渡辺裕之、鹿取 渉の各氏にはお世話になった。この場を借りて感謝申し上げます。本論は査読者の指摘により、改善された点が多かったことも記しておきたい。なお本研究はJSPS 科研費基盤 (B) 22H007724による研究成果の一部である。

引用文献

- 石川日出志 1994「堂ノ貝塚」『縄文時代研究辞典』。p.554。東京。東京堂出版
- 上屋眞一 2012「ユカンボシ E11遺跡 JH-7出土の炭化矢柄と一括石鏃」『ユカンボシ E11遺跡Ⅲ』pp.205-213。北海道。恵庭市教育委員会
- 小片 保・森沢佐歳 1977「V 人骨所見」『堂の貝塚』pp.53-57。新潟。金井町教育委員会
- 加藤元康 2018「佐渡市堂の貝塚第6号人骨共伴石鏃の検討」『新潟考古学談話会会報』36。Pp.1-5
- 加藤元康 2020「縄文時代土坑墓の多数石鏃の背景についての試論」『芙蓉峰の考古学Ⅱ』pp.81-90。東京。六一書房
- 金井町教育委員会 1977『堂の貝塚 新潟県佐渡郡金井町堂の貝塚調査報告』64p。新潟

近藤 敏 1984「8 縄文時代の石器」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』561-570. 埼玉. 埼玉県立博物館

近藤 敏 2015「縄文時代の矢柄—石鏃と矢柄の装着について—」『土曜考古』37. pp.1-22. 埼玉

さいたま市遺跡調査会 2017『南鴻沼遺跡（第3分冊）』392. 埼玉

原田昌幸 1988「縄文人の装い」『古代史復元3 縄文人の道具』小林達雄編, pp.121-136, 東京, 講談社

Stone arrowheads as burial equipment : Stone arrowheads accompanied No.6 human bone from Dono Shell Midden

Yoshiaki Kurishima^{1*}

Abstract

There are only a few examples of shell middens along the coast of the Sea of Japan all through the Jomon period as there are fewer inlets than the Pacific coast, and there are not many research examples of shell middens. However, Dono Shell Midden in Sado City, Niigata Prefecture is known nationally as it has yielded many human bones, and especially among them, 13 arrowheads along with a shark tooth pendant were discovered as burial equipment for №6 human bones. In this article the stone arrowheads were examined in detail, and it was confirmed that they consisted of multiple arrowhead types and were unused finished products without any defective parts. These were a set of medium/large arrowheads with quite high conformity manufactured from local stones (jasper or opal), and it was pointed out that there is a need to consider the possibility of being manufactured in premise of burial equipment.

Examples are relatively well known where lithics such as stone axes, knives, and arrowheads accompany buried human bones. However, it is rare to yield specially manufactured finished pieces like Dono Shell Midden, and as arrowheads were organized by forms, there is a strong possibility that they were buried with shafts attached and lined beside the body. It could be said this example could be an archetype in consideration of burial equipment evaluation and burial customs in the Jomon period.

Keywords : Stone arrowhead, shaft, jasper, opal, shark teeth, mass grave, burial equipment

(Received 20 December 2022 / Accepted 12 January 2023)

¹ Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, 1-6-3 Kanda-sarugaku-cho, Chiyoda, Tokyo 101-0064, Japan
^{*} Corresponding author : Yoshiaki Kurishima (a123kuri@yahoo.co.jp)